

氏名(本籍)	安 <sup>やす</sup> 富 <sup>とみ</sup> 信 <sup>しん</sup> 哉 <sup>や</sup> (新潟県)		
学位の種類	博士(文学)		
学位記番号	乙33号		
学位授与の日付	平成10年10月14日		
学位授与の要件	学位規程第3条第2項		
学位論文題目	宗教的「個」の思想 ——清沢満之と精神主義——		
論文審査委員	(主査)	文学博士 教授	寺川俊昭
	(副査)	文学博士 教授	鍵主良敬
	(副査)	教授	箕浦恵了

### 学位請求論文審査要旨

この論文において清沢満之を取り上げ、彼において宗教的「個」を考察する理由を、筆者は次のように述べている。

私が宗教的「個」としての満之の生きざま、そして、その「個」の思想に学ぼうとするのは、私自身、一種の精神的漂白感から抜けだせないからである。一本に貫かれた確かな中心軸がみえにくい、まさに軽い「軽毛の凡夫」である私。しかし、そのような漂白感はいちだけのものであろうか。少なからず、現代の日本の多くの人々が抱えている感覚ではなかろうか。そのようなことを考えるとき、ひとりの宗教的「個」としての満之の生きざま、そして、その「個」の思想は、彼の没後ほぼ一世紀たった今、なお私たちに生の原理を呈示しているように思われる。

このような色濃い宗教的関心に促されて、筆者は清沢満之における「個」の形成と、精神主義に結実するその「個」の思想を究明するのであるが、この関心が要求する研究の方法について、筆者はいくつかの先行論文に示唆を得つつ、次のようにそれを示している。

私が小論でとる中心的な方法は、厳密な文献学と客観的アプローチを特徴とする〈科学的方法〉でも、比較思想や哲学的アプローチを特徴とす

る〈人文学的方法〉でもない。真宗学の伝統がこれまで取ってきた〈規範的方法〉(normative approach)である。

研究の動機と方法とをこのように示して、筆者は真宗学の伝統に連なりつつ、清沢満之を「宗教によって自立した人間像」と性格づけ、これを宗教的「個」と呼ぶのである。

そして、その清沢満之を、仏教とくに浄土真宗の信仰によって、「個」としての自己を形成するとともに、「精神主義」の名のもとに、仏教を人間独立の教えとして、同時代に生きる人々、とりわけ若い世代の人々に訴えていった能動的仏教者として理解している。

さらに、「近世以来の日本の精神的伝統において、宗教(仏教・神道)は、集団の中でのセルフ・アイデンティティは育てたが、個(the individual)としての主体的自覚を育むことは乏しかったといえよう。日本の近代の序幕期である明治には、新しい時代のなかで仏教を再生しようとした幾多の指導者が出現した。彼等は、先進的な活動を行ったが、これらの推進者たちがひとしく旗印にしたのは、仏教護国論、仏教国益論であった。その中で清沢は、個我の叫びを明治精神界にあげた数少ない一人であった。」と、明治仏教界における清沢満之を位置付ける筆者は、研究の視野を、清沢が積極的に独自の使命を自覚し、敢えて身を置いた真宗大谷派の宗門に限定しないで、広く明治の精神史にまで拡げ、上記した課題的関心に立ってこの研究を展開して行くのである。筆者のこの幅広い関心と、それに促されて宗教的「個」として清沢の思想を考察する視野の広さを、特記したい。先行する清沢研究の中に、清沢のいわゆる「信念」の主観性と、その思想におけるいわゆる「社会性」の欠落を、清沢における問題性として指摘する見解のあることは周知のとおりである。それに対して筆者は、その適否を検証することをこの論考の伏在する課題的関心として保持しつつ、清沢の生きた時代における清沢および精神主義について言及し論及した発言、その後、現在に至るまでの同じ関心に立っての研究を幅広く渉猟して、清沢の思想のもつ「社会性」を検証し、むしろ弁証している。この点については、筆者の秘められた情熱が感ぜられ、相当に強い印象を読者に与えている。

#### 〔論文内容の要約〕

400字詰原稿用紙563枚に及ぶ論文に、筆者は中村元・武田清子監修『近代

日本哲学思想家辞典』に執筆した、よく整理された「清沢満之の生涯と思想の概略」及び「『精神界』年表」を付説として添えている。

周知のように清沢は、建峯・骸骨・石水・臘扇・浜風を名のっている。これらの号が、清沢の思想の展開の節目とすべきものをよく表しているのであるが、筆者はこの号に従って清沢の生涯と行動を追い、その個の形成と思想についての考察を進めている。その論考の概要を、まず論文の目次に従って承知したい。その際、筆者は各章ごとに「はじめに」を置いて、その章の主題を明示する配慮を示している。

## 序 問題の所在

はじめに

第1節 個の自覚の伝統

第2節 近代日本における個

## 第1章 哲学者の誕生

はじめに

第1節 哲学修行時代

第2節 教壇での講義

第3節 『宗教哲学骸骨』

## 第2章 僧伽的人間として

はじめに

第1節 僧伽への祈り

第2節 明治中期の真俗二諦論のなかで

第3節 『教界時言』(前期)

第4節 『教界時言』(後期)

## 第3章 自己の探究

はじめに

第1節 黙忍堂臘扇

第2節 エピクテタスとの出会い

第3節 分限の自覚

第4節 能動的自己の誕生

第5節 人界の独立者

第6節 真に自己なるもの

## 第4章 他己の開発

はじめに

第1節 自律的修養の思想

第2節 人間成就の教育

第3節 平和的文明への希求

## 第5章 精神主義

はじめに

第1節 内観的煩悶の時代と孤独な個

第2節 『精神界』の発行

第3節 精神主義の思想

## 第6章 わが信念

はじめに

第1節 倫理と宗教のあいだ

第2節 わが信念の内景

結 精神主義の遺産

——精神主義の遺産——

## 付 説

1. 清沢満之の生涯と思想の概略及び主要参考文献
2. 『精神界』年表

序章で筆者は、この論文の主題と方法について論述する。はじめにこの論文において考察を進める「個」について、「自由意志に基づく主体的な人間」と了解することを述べ、その理想型というべきものを西欧に見るとともに、明治初期の日本において、個の思想が形成されはじめる過程を概観する。その概観をへて、精神主義を「どこまでも個人性の立場を重視する主張であるという点において、独自の宗教的個人主義であった」と性格づけている。

なお、筆者は宗教的「個」として清沢満之をみる関心について、「この研究の目的にとって、より中心的なことは、個人性という問題である。明治期に起こった日本社会の近代化は、宗教的な人々にどのような影響を及ぼしたのだろうか。特に清沢満之のような真宗仏教者は、近代社会の個人化の影響をどのように体験したであろうか。(中略)清沢満之が個人主義に向かう潮流をどのくらい例証しているかということは、興味深い事である。」と述べる

Gilbert Lee Johnston 氏の論文「Kiyozawa Manshi's Buddhist Faith and Its Relation to modern Japanese Society」(1972年 Harvard 大学学位取得論文)に、大きな示唆を得たことを、特記している。

「哲学者の誕生」と題する第1章で、筆者は少年の日の就学から、日本で最初の本格的な宗教哲学論と評される『宗教哲学骸骨』に至るまでの、草創期の東京大学における哲学の学びをとおしての、清沢の思想形成を考察する。特に精神主義の基本概念の一つである「万物一体」について、それが陽明学の学びに由来するのではないかとの推測は興味をひくが、それがさらに大学時代の哲学研究の中で、フェノロサの感化のもとで、「スペンサー・ラッシュ」<sup>1)</sup>と後の研究者が指摘するほど、当時積極的な関心をもたれたスペンサーの「社会進化論」に清沢もまた強い関心を持ち、いくつかの示唆を得たことを指摘する。しかし、清沢はその有機的世界観を形成していく上で、スペンサー・イズムを全面的に肯定したのではないことを、筆者は特記している。

この時期、哲学者として自己を形成しつつあった清沢は、やがて哲学教師としての仕事を進める人にもなっていった。その一つの仕事が哲学館における「純正哲学」の講義であり、いま一つが真宗高倉大学寮での「西洋哲学史試稿」であり、特記すべきものが、『宗教哲学骸骨』である。ロッチェの感化のもとになされた「純正哲学」に示された西欧哲学の理解、ことに「西洋哲学史試稿」の内容については、先行論文がその先駆性と理解の正確さについて積極的に評価する見解を示しているが、筆者はそれに示唆されつつこの2つの講義に、「万物一体」の内容づけと理解される清沢の思索を尋ね当てるべく、その論考を進めている。ことに「西洋哲学史試稿」においては、ストア派に大きな関心が払われていることに注意し、「やがて精神主義に表れる万物一体論は、このストア主義の万民同朋的な人間愛をうちに含む思想であると考えられる」と述べ、この章の論考を結んでいる。

『宗教哲学骸骨』は前述したように、日本における最初の本格的な宗教哲学書であり、波多野精一の宗教哲学と対比されるべき価値を有すると、筆者はいう。その内容を章をおうて考究するのであるが、宗教を「有限と無限との対応」とする清沢の理解について、筆者は特に二つの事柄を指摘する。

一つは清沢が宗教あるいは信念を語るときの基本語として用いられる、「無限」についてである。清沢がこの語を得たのは、大学時代に清沢が非常な関心をもって学んだヘーゲルからであろうと理解されているが、さらに清

沢が親交があり、サンスクリットによる仏教研究を開拓した南条文雄を介して、マックス・ミュラーの宗教研究の見解に啓発を受けた事、さらに「南無阿弥陀仏」の「阿弥陀」の原語 amita が「無限」を意味することばであることを承知することがあったからではないかと、筆者は推考している。

第二は「対応」についてであるが、筆者はこれを世親の「相応」、曾我量深の「感応」との呼応の中で了解しようとする、興味深い見解を示している。

第2章の「僧伽の人間として」では、筆者は真宗大谷派という宗門を自覚的に生きる場として選び取り、一人の仏教者として誠実に生きた清沢を尋ねている。清沢は単に真宗大谷派に所属したというのではなく、この宗門を決断して選び取った仏教者である。このような清沢を「僧伽の人間」すなわち仏法の共同体に、自覚的に生きた人間として了解する筆者は、清沢自身が「ミニマム・ポシブルの実験」と呼んだ禁欲の生活と、「大谷派事務革新運動」と呼んだ宗門改革運動について考察を進める。ただし筆者はこの主題については先行論文に譲り、主として力を注いで考究を進めるのは、いわゆる「真俗二諦論」である。この真俗二諦論は周知のように、真諦すなわち信仰についての規範として、信心による往生極楽を説き、現生における社会生活の規範すなわち俗諦として、天皇制的国家体制に従順な国家忠良の臣民であることを強く求めた真宗の主張である。これは明治真宗教団が複雑な配慮のもとに、いわば宗門を挙げて強く訴えた、真宗の存立理由をかけたような主張であった。

その真俗二諦論に対して、清沢は「俗諦案内説」と理解されている、独特の俗諦論を表明していく。それは俗諦の教えは、それを実行せよと勧めるためにあるのではなく、その実行の不可能であることを覚知せしめるためにあるのであって、その内容の適否は問うことはない。国家や社会の有用性のために宗教はあるのではない、この俗諦理解である。真俗二諦論が強調された状況の中での清沢のこの独特の俗諦理解が、国家主義を相対化し、国家至上主義に対する批判の意味をもつことを、筆者は綿密に考察する。

なお、この章で筆者は、宗門改革運動の機関紙であった『教界時言』に注目し、それを改革運動の機関紙として宗門状況に密着した発言を中心とする「前期」と、改革運動を終結したあと、宗門をこえて広く仏教界へ呼びかける見解を中心とする「後期」とに分けて、そこに表明された清沢の思想を究明している。そして後期の『教界時言』に、後の『精神界』の先駆をみてい

る。

第3章「自己の探究」で筆者は、宗門改革運動を終結してのちの、清沢の信仰上の転回、信念の確立について、論考を進める。この時期、清沢はよく知られた「黙忍堂臘扇」の号を名のるのであるが、その中で書かれた日記である『臘扇記』を中心的な資料として、清沢の自己探究の跡を辿り、どのような道程を経て、他力信仰に基づく宗教的「個」として自己を確立したかを、論考している。

周知のように清沢は、その信念確立の上に大切な糧となったものを、「余の三部経」として語っている。『阿含経』と『エピクテタス氏教訓書』と『歎異抄』とであるが、その日記『臘扇記』を子細に読み解くことをとおして、それぞれのテキストから清沢が学び取ったものが何であったかを、克明に推考している。ことに『臘扇記』にしるされた清沢の問い、「自己とは何ぞや、これ人生の根本的問題なり」を尋ねることをとおして、清沢における信念の確立が、「独尊子」と清沢自身が語るように、筆者のいわゆる宗教的「個」の成立であることをめぐって、論考を進めている。

第4章「他己の開発」、第5章「精神主義」で、筆者は「精神主義」の名のもとによく知られた、清沢の信仰運動について詳説する。筆者自身は論述の概要について、第4章においては「満之の生涯を貫く信仰的实践としての修養の意義と、新都東京での彼の活動、特に浩浩洞や真宗大学を場としての青年教育に従事した満之について尋ねた。」とし、第5章については、「明治中期から後期における青年たちの懐疑・煩悶状況と、その状況の中で、満之がその宗教的信念の対外的表明として唱導した「精神主義」について論じた。」としている。さらに、「従来の満之論では、彼に欠けているとされている満之の対他、対社会的活動の意義を論じた。」と述べているように、この2つの章の論述が、この請求論文において最も力を注いだものとなっている。

第6章「わが信念」においては、清沢最晩年の最もよく知られた文章、「宗教的道德(俗諦)と普通道德との交渉」、「他力の救済」及び「我は此の如く如来を信ず」を中心的資料として、清沢の最晩年の信仰がどのようなものであったかを考察している。その論考の中心的関心は、倫理と信仰との関係について、清沢がどのような知見を持つに至ったのかを、尋ね当てようとする点にあるようである。さらに清沢が多年にわたって使用してきた基本語である「無限」を、はっきりと真宗の伝統に立つことを表す「如来」にかえ

て、その信念を語り告げる絶筆「我は此の如く如来を信ず」によって、清沢の信仰の内景を尋ね、そこに宗教的「個」としての満之の到達点があることを論考している。

最後の「結、精神主義の遺産」において筆者は、「明治仏教と精神主義」、「その近代日本における位置」について論述し、この請求論文を結んでいる。筆者が「明治仏教と精神主義」に述べる次の見解は、この論文の要旨を凝集的に示しているように思われる。

明治仏教を振り返って見る時、仏教が当時、国家の大きな力の前に、民族の集団原理に対して、宗教的「個」の立場を十分に顕揚することができなかったことが注意される。そのような全般の状況の中で、精神主義は特異な位置を占める。満之の晩年、精神主義に対して仏教界から、論難の集中砲火が浴びせられたのは、明治仏教の歩調と合わなかったからである。ただ、なぜか満之は、それらの論難に真向から反論することはなかった。いまさら指摘することは不要かも知れないが、歴史を振り返れば、精神主義の個の立場が、様々な場面で多様に開花したということではできない。したがって『新仏教』の同人たちに始まり今日に至るまでの精神主義批判は、まったく不当なものだというわけにいかない。が、明治仏教が「近代仏教」へと脱皮するために大切な要件は、何よりも個の自覚の強調であったはずである。しかし明治仏教全般にそのような個の確認が十分ではなかった。その意味において、個の自覚と自立をみずからの主張として唱導した精神主義の拓いた地平は、パイオニア的な意義を持つものであった。しかも肺結核という疾患のなかで、孤独に苛まれながら、他力の信心によって、主体的に自己を生き、精神生活において、また、後進の指導において、その死に至るまで、退却することなく、逃避することなく、常に前進的に生き続けた。この点を私は忘れてはならないと思う。私は、このような満之の姿に、親鸞のいわゆる「よきひと」(『歎異抄』第二章)を仰ぐのである。

### 〔論文審査の要旨〕

請求論文の論考の概略乃至は要点は、ほぼ以上のとおりである。筆者は上記したように、深い宗教的関心をもって清沢満之に向かい、その信念と宗教的精神の確立される過程と、それが「精神主義運動」と呼ばれる信仰運動と



して社会的に表明されていく過程について、克明に論考を深めている。この清沢満之研究において、筆者は論題に示しているように、宗教的「個」という視点に立ってその論考を進め、清沢満之の信念が持つ意味、すなわち、どのような主体を形成するかを考究し、その信念が世に捧げられた精神主義運動が、明治の宗教史において、さらに明治の精神史において、どのような位置にあるかを論究している。ここに、この請求論文の特色乃至は独自性があると、理解することができる。

このような関心に立って清沢研究を進めるに当たって、筆者は先ず方法論の吟味を行い、この関心が要求する方法として、上記したように、真宗学の伝統がこれまでとってきた「規範的方法」を論考の方法として採ることを表明している。それはいうまでもなく、清沢における「信念の確立」を一つの「規範」として研究を行うという方法である。それによって、この研究は従来の真宗学の型をとってはいないけれども、一つの真宗学の論文というに値する性格を持つものであると、了解するものである。

規範的方法に立って宗教的「個」として清沢満之を研究するとき、研究の関心が一人の信仰的実存としての清沢個人に限定されるかも知れない。この問題的な傾向についても筆者は、この宗教的個を、「類」の枠組の中で考えていきたかったという。例えば明治仏教はさまざまな「仏教復興運動」を展開するのであるが、そのほとんどは「種」すなわち国家や民族の立場でのそれであったのに対して、精神主義は「類」の立場に立ってのそれであると了解すると、筆者はいう。その類と個との関係を、筆者は清沢の思想に顕著にみられる、いわゆる社会有機体説にみるのであるが、清沢の場合、その「万物一体論」においては有機体は、例えば『華嚴経』などの感化を受けて、社会を超えて宇宙的・法界的広さにおいて、つまり、まさしく種を超えた類的なものとして顕開されていると、筆者はいう。さらにこの有機体が「主伴互具」すなわち相互主体説の立場でも了解されていることにも、筆者は注意を喚起する。

こうしてこの論文は、清沢満之の信念と思想を、宗教的「個」という独自の視点に立って、論考するものであるが、上記の課題的関心に立って、清沢の信念と精神主義の思想を、社会の課題的状況との連関の中で、また社会の課題的事象への発言という関心に立って、広い視野で考察を進めている。このような課題に関わる清沢の発言、またこのような課題に立っての清沢の信

念と思想への論評を、筆者はそのほとんどすべてにわたって検証している。ここにこの論文の、これまでに発表された相当の量にのぼる清沢研究に対しての、すぐれた積極性をみることができる。

なお、この論文の方法論において提示された、信仰的実存を考える場合に「類」という視点の適切さ、そして個と普遍の対応の問題については、なお、検討を要するのではないかとの見解が提示された。そして規範的方法を採って清沢の信念を研究するこの論文においては、親鸞の信心と清沢の信念との等質性について、さらに、清沢の宗門改革運動について、その論考が十分では無いとの感もあった。しかしながら筆者は、これらの主題については先行論文にゆずり、上記の課題的主題の論考に、主たる研究の関心を集中したと了解されることである。

以上のような講評に立って、審査委員一同は、安富信哉氏提出にかかるこの学位請求論文について、十分にそれに値するものと判断した。

#### 〔最終試験及び語学試験の結果〕

審査に当たって必要とされる最終試験及び語学試験については、論文の内容及びそれに関連する事項について、面接試験並びに語学試験を行い、筆者が学位規程の定めによって必要とされる学力を有することが確認された。

氏名(本籍)	小 <sup>お</sup> 野 <sup>の</sup> 蓮 <sup>れん</sup> 明 <sup>みょう</sup> (石川県)		
学位の種類	博士(文学)		
学位記番号	乙第34号		
学位授与の日付	平成10年10月14日		
学位授与の要件	学位規程第3条第2項		
学位論文題目	本願の行信道 ——親鸞の信仰主体性論——		
論文審査委員	(主査)	文学博士 教授	寺川俊昭
	(副査)	文学博士 教授	鍵主良敬
	(副査)	教授	武田武磨

### 学位請求論文審査要旨

親鸞の仏者としての初心というべきもの、すなわちその体験をもつことによって、親鸞が「仏道」と呼ぶに値する自覚道に立った体験を、『歎異抄』は、「念仏もうさんとおもいたつ心のおこるとき」という、いかにも意味深いことばで伝えている。この体験を親鸞自身が思想的に性格づけて「選択本願の行信」と呼び、『教行信証』において、浄土真宗という仏道をそこに実現する自覚という、大切な位置を与えている。

この選択本願の行信は、一つの根本的な信仰的自覚であるだけでなく、上記したように「仏道」と呼ぶに値する自覚道を実現する能動性をもつ。その自覚道を「行信道」と表すのが、真宗学がほぼ共有する知見であるが、この行信道を思想的に解明することが、「本願の行信道」というこの請求論文の題名に示されている、論者の課題的関心である。

この本願の行信について、論者はさらに、それが一つの信仰的実存を実現することに、強い関心を示している。親鸞が「行信」と呼ぶ本願の仏道における信仰が実現するこの主体を、論者は、「信仰主体」ということばで表すのであるが、それは同時に、「本願の行信道」に立ち、それを生きていく主体にほかならない。この「信仰主体」の解明を関心の中心に置きながら、

「本願の行信道」と論者が性格づける浄土真宗の特質を考究したのが、この論文の性格である。

親鸞が開顕した浄土真宗は、もとより往生浄土の仏道の伝統に連なるものであるから、浄土真宗の仏道としての性格を、「往生浄土の仏道」と了解することが一般であり、かつ当然である。しかしながら親鸞は、浄土真宗を往生浄土の仏道として性格づけるだけではなく、それをさらに根源化して、群萌として生きる衆生に開かれた無上仏道であるとし、それを、「誓願一仏乗」ということばで表明していくのである。無上仏道というのは、「煩惱を具足しながら無上大涅槃にいたる」と親鸞が述べているような、無上涅槃の証得にいたる大乘仏教の自覚道をいう。

このような真宗理解は、すでにいくつかの先行論文に強調的に表明されているのであるが、論者はこのような真宗理解の系譜に連なる立場をとり、その知見をよく表している親鸞のことばを、『教行信証』『証巻』と『唯信鈔文意』から取って、次のようにいう。

○然るに煩惱成就の凡夫、生死罪濁の群萌、往相回向の心行を獲れば、即の時に大乘正定聚の数に入るなり。正定聚に住するが故に、必ず滅度に至る。(証巻)

○ひとすじに、具縛の凡愚、屠沽の下類、無碍光仏の不可思議の本願、廣大智慧の名号を信樂すれば、煩惱を具足しながら、無上大涅槃にいたるなり。(唯信鈔文意)

といわれている文は、本願の名号に帰する一心帰命の信、すなわち本願の行信こそ、まさに一切苦悩の群生海に開かれた無上仏道であることを、闡明に語っている。

浄土真宗についての基本的了解をこのように述べたあと、論者はこの請求論文の趣意を、次のようにしるしている。

これらの文(上記の2文)は、本願の名号に帰する一心帰命の信、すなわち本願の行信こそ、われらの流転するこの生を転じて大般涅槃無上の大道に立たしめる、根源的な自覚であると、教えている。しかも一心帰命の信は、われら衆生を無上涅槃の道に立たしめるだけではない。その信心は、本願の行信として如来の願心の回向成就であるから、如来の欲生の願心に支えられて、如来の願心を、生きることのすべてを挙げて行証しようとする、願生浄土の自覚道にわれらを立たしめるものである。

一心帰命の信として獲得され、一心願生の信として展開する本願の行信、親鸞の仏道了解の基軸と積極性は、この一点にあるといえる。この小論は、親鸞における選択本願の行信道としての仏道了解を、特に親鸞における信仰主体性論という視点から考察するものである。

### 〔論文内容の要約〕

この請求論文の内容・構成は、次の目次に示されるとおりである。

## 目 次

はじめに

### 第1章 『教行信証』撰述の志願と課題

1. 専修念仏の弾圧と明恵の論難
2. 親鸞における菩提心
3. 法然における信仰主体の問題

### 第2章 選択本願の機

1. 「愚禿釈親鸞」の名のりと「われら」の地平
2. 回心の内景
3. 宿業の自覚と二種深信
4. 本願真実を興す『観無量寿経』—総序を通して—

### 第3章 選択本願の行信—無上仏道の開頭—

1. 真実教の開頭
2. 大悲の本願—法藏菩薩の発願と成就—
3. 願と信の相応—本願成就としての信—
4. 信楽の論理—三心一心問答の帰趨—
5. 信心の体—本願の名号—

### 第4章 回向成就の信—主体の回向—

1. 選択本願の行信
2. 浄土を開示する行
3. 信心獲得—証大涅槃の真因—

4. 回向成就の信—信と時—

5. 信決定における転成の道理

第5章 無上涅槃道に立つ生

1. 不断煩惱得涅槃—信心の現証—

2. 現生正定聚—難思議往生—

3. 無上涅槃道の証—夢告和讃の意義—

以下、目次にしたがって、論考と論述の概要を示そう。

第1章 『教行信証』撰述の志願と課題

『教行信証』は親鸞の主著であり、仏道を浄土真宗として開顕するという思想的事業を果たし遂げた、真宗開顕の根本論と理解されるべき論書（思想的論文）である。その正式の題号は『顕浄土真実教行証文類』であるけれども、その「教行証」が仏道を表すことばであることは、周知のとおりである。その題が示しているように、この論書を著した親鸞には、真実の仏道を顕らかにしたいという、志願ということばで表すことを求めるような、強い課題感が動いていた。それを親鸞に促したものとして、論者は次の二つの立場にある仏教者への「批判と克服」を指摘している。

その第一は、法然の専修念仏の仏教運動に対して、弾圧と禁止を叫び訴えた聖道の仏教者に対してであり、第二には、法然の教えに帰しながらも、「定散の自心に迷うて、金剛の真信に昏し」と親鸞が悲歎した、浄土の仏教者たちに対してである。

ことに第一の聖道の仏教者に対しては、法然の専修念仏の仏教運動に対しての、聖道の仏教者たちの禁止と弾圧の根にあるものを、親鸞は鋭く抉り出して、聖道の仏道の退廃と外道化があると悲歎すると、論者は理解している。この批判に促されて撰述された『教行信証』は、だから、歴史的には承元の法難、嘉禄の法難に代表される、「専修念仏」を旗印とする法然の仏教運動に対する度重なる弾圧に対して、また思想的には、明恵の『摧邪論』に代表される『選択集』への弾劾に対して、法然の選択本願念仏の一道こそが、「群萌に開かれた大乘至極の無上仏道であることを開顕せんがためである」と、論者はその論述を進めている。

## 第2章 選択本願の帰

「選択本願の機」とは、如来の選択本願によって救われるものについての実存的自覚であるが、その「機」すなわち本願によって救われるものを自分において自覚することは、そのまま、如来の選択本願を身をもって生き、選択本願を証しする使命をもつものと、自己を自覚することとなる。

論者は、親鸞の名のりであった「愚禿釈親鸞」は、このような「選択本願の機」の親鸞における主体的表明であると了解している。この名のりに託された親鸞の自覚を尋ねて、論者はまず、「雑行を棄てて本願に帰す」と表明された、親鸞の「回心」に注目する。この回心によって親鸞は、やがて「愚禿釈親鸞」と名のる信仰的実存となっていくのであるが、そのような回心とは、体験としていえば「懺悔」にほかならない。この懺悔に注意するならば、回心における信仰的自覚の内面は二種の深信であると、論者はいう。そして早く善導によって示され、親鸞によって「他力至極の金剛心、一乗無上の真実信海」とその積極的意味が尋ねあてられた二種深信について、立ち入った論考が進められている。

二種深信のうち、就中いわゆる機の深信について、曾我量深は早く「機の深信から、宿業の身の自覚が開かれる」という了解を示しているのであるが、論者は曾我量深の了解に教示を得つつ、いわゆる「宿業」について考察を進めている。そして「宿業とは、自己存在の根源的把握であり、罪業の身をその底なき深みから根源的に領知する自覚である」と、論者の宿業についての基本的見解を述べるのであるけれども、この章で展開した論考は、この請求論文の主題である「信仰主体」を、親鸞の見解に依りつつ、「愚禿釈親鸞」の名のり、いわゆる「機の深信」そして「宿業の身」とその具体相において考察したものであると、了解することができる。

## 第3章 選択本願の行信—無上仏道の開顕—

この章で論者は、この請求論文の主題である「親鸞の信仰主体性論」のその「信仰主体」を実現する親鸞の信心を、主題的に考察している。その信心を親鸞その人が「選択本願の行信」と性格づけていることは、すでに述べたとおりであるが、この「行信」という概念にまず注意を促しておきたい。行信とは一つ概念であって、「行と信」すなわち念仏と信心と、この二つを

表しているのではない。もし、『歎異抄』の表現をかりれば、「本願を信じ念仏する心」である。この念仏と信心について、しばしば「法然は念仏為本、親鸞は信心為本」という理解が語られるけれども、これは通俗的で啓蒙的な理解であって、適切とはいいいにくい。むしろ親鸞は師法然との「信心の同一性」を大切に、親鸞が獲得した信心が法然と同一の信心であることを、法然の独自の本願理解を表すことばに依って、「選択本願の行信」と語る所以あり、これが法然・親鸞二人の仏教者が共に立った信仰的自覚である。

この「選択本願の行信」の特質というべきものを、親鸞は信心の根拠と了解した、法藏菩薩の名で表される「願心」にまで遡って推究した。それが『教行信証』『信巻』に展開した、いわゆる「三心一心の問答」である。

この行信を解明する論者は、親鸞が法然の教言との値遇において体験した、仏者親鸞の初心というべき「念仏もうさんとおもいたつ心」を親鸞自身が「真実の教」とした『大無量寿経』の、本願の成就を説く教説によって自覚化したあとを尋ね、さらにそれを、世親の『願生偈』によって、「一心帰命・一心願生の信」と了解する。この「一心帰命の信」を親鸞は、「選択本願の行信」と性格づけたとし、この行信の展開である「真実の教行信証」によって、衆生の上に浄土真宗と呼ばれる仏道が成立するとしたのが親鸞であると、論者はその論考を進めていく。

この真実の教行信証について親鸞は、その特質というべきものを、「真如一実」ということば、すなわち無上涅槃のはたらきを表すことばで示している。親鸞のこの見解を克明に辿る論者は、親鸞は法然の「念仏往生」と仏道を性格づけたその知見を継承しつつ、さらにそれを根源化して、「大般涅槃道」として浄土真宗を顕揚したのでであると、真宗の仏道としての積極性を解明している。

なお、この選択本願の行信を「如来清浄願心の回向成就」とするのが、親鸞の信仰理解の画期的な見解であった。その願心の主体は、『大無量寿経』においては周知のように法藏菩薩と表されている。この法藏菩薩をどのように了解するかが、真宗教学の大きな課題であるが、論者は法藏菩薩の探求において開拓的な意味をもつ曾我量深の思索に大きな示唆を得つつ、親鸞の法藏理解を推究している。その了解を、論者は次のように述べる。

一如に背いて自己の自我性を主体なるものとして執し続けてきた自己心と、それを内から破って、自己における真に主体なるものとして名告り



出る主体、それが法蔵菩薩の思惟と修行である。本願において本願を生み出す根源、本願展開の原理、またその自証の原理も、本願自身の内なる「欲生我国」の欲生心である。欲生の願心こそ、法蔵の願心を願往生心たらしめる大悲回向心として、機の中の更に機なるものとして根源的の主体であるといえよう。

#### 第4章 回向成就の信一主体の回向一

安田理深に、「賜りたる主体」と題された講話がある。世親は『大無量寿経』の教説に帰して獲た信を、「世尊、我は一心に尽十方の無碍光如来に帰命し、安楽の国に生まれんと願う」と表白するのであるが、そこに表白されている「我」は、信心の獲得によって流転する古い自我に死に、如来の真实功德に依って生きる新しい自己に新生したという、全体が感謝の中に自覚される主体を表すことばである。それを安田は「賜った主体」という、個性的なことばで語ったと考えられる。

論者はおそらく安田のこの見解に示唆を得て、親鸞が「願心の回向成就」とその特質を示した信心は、新しい主体を恵むような意味をもつ自覚であるとの了解を得たのであろう。その観点から「願心と信心」との関係をさらに推究したのが、この第4章の論述である。論者が得た見解は、次の論述によく示されている。

帰命の信が如来の願心の回向成就であるということは、一步踏み込んで考えるならば、願心がわれらの主体として成就することであって、主体の回向であるといえる。世親が「世尊我一心 帰命尽十方 無碍光如来 願生安楽国」と表白された一心帰命の信において、[我]と名乗った主体は、世親に名告り出た如来(法蔵菩薩)である。願心の主体である[我](設我得仏の我)がいま世尊の教説に開かれた信心の主体である[我](世尊我一心の我)として、ここに現前し現成しているという了解である。信心の成就とは、このような主体の回向であり、主体の成就なのである。

#### 第5章 無上涅槃道に立つ信

この章で論者は、1. 不断煩惱得涅槃—信心の現証—、2. 現生正定聚—難思議往生—、3. 無上涅槃道の証—夢告和讃の意義—という3つの節にお

いて、その論考を進めている。ここに挙げられているものは、いずれも親鸞が浄土真宗を語るときの基本概念と理解されるものであるが、第1の「不断煩惱得涅槃」とは、曇鸞が浄土を実現する功德の第一として示したものである。曇鸞は「凡夫人の煩惱成就せるありて、またかの浄土に生まるることを得れば、三界の繋業畢竟して牽かず。すなわちこれ煩惱を断ぜずして涅槃分を得、いづくぞ思議すべきや」と語り、このような清浄功德すなわち無上涅槃の功德のはたらく世界を、安楽浄土と了解するのである。それを受ける親鸞は、「正信偈」に「能発一念喜愛心 不断煩惱得涅槃」と語り、曇鸞が浄土の功德とした「不断煩惱得涅槃」を、明らかに信心において自証されるものと了解している。

第2の「現生正定聚」であるが、親鸞は本願の名号について、無上涅槃の真実功德を衆生に回施する法であるとする、きわめて創造的な了解を確立している。その本願の名号に帰した自覚である行信は、その真実功德の回施を自証するような自覚であるとするのが、親鸞の積極的な行信理解であった。

このような行信理解に立って親鸞は、その行信が実現する生存を、行信において回施される無上涅槃の真実功德に依って立つ生存、きわめて自然に、そして必ず無上涅槃の証得に決定された生と了解し、これを「正定聚に住し、必ず滅度に至る」生とするのである。のみならず親鸞は、このような生存の歩みを「難思議往生」と呼び、長い浄土教の歴史をとおして、命終ののちに極楽浄土に生まれることと理解されてきた、いわゆる「未来往生」に簡んで、現生に正定聚のくらいに住し涅槃無上道に立った生の歩みをもって「真実報土の往生」とする、まことに独創的な往生理解を確立したのである。

この章で論者は、その章題・節題が示しているように、このような親鸞開顕の自覚道について、論考を進めている。それによって「本願の行信道」の内容、ことばを換えれば「親鸞の信仰主体」がどのような自覚道を生きるものであるかを、明確にしようとしている。

### 〔論文審査の要旨〕

9月10日、3人の審査委員が出席して、論者に対して試問を行った。提起された問題点の主なものは、次のとおりである。

1. 『唯信鈔文意』に親鸞は、次のように述べている。「法身は、いろもなし、かたちもましまさず。しかれば、こころもおよばれず。ことばもた

えたり、この一如よりかたちをあらわして、方便法身ともうす御すがたをしめして、法蔵比丘となりのたまいて、不可思議の大誓願をおこして、あらわれたまう御かたちをば、世親菩薩は、尽十方無碍光如来となづけたてまつりたまえり。」

この文章を論者は、数回引文して論考を進めている。親鸞は一種の擬人的表現で「如来」についての了解を述べているが、この文章についての論者の了解、さらにしばしば述べられている如来についての了解は、如来を人格的に了解する見解、「一如」に意志をみるような、ある種の実体的な了解に傾斜した見解、という印象を与える。このような如来理解は、親鸞の如来理解として、十分に適切であろうか。

2. ある種の「宗教哲学的表現」、例えば「絶対否定即絶対肯定的に」、あるいは「絶対超越的にして絶対内在的」という類のことばが、論述の中にしばしば使用されている。十分な内容づけが必要と思われるこれらの独特のことばのやや不用意な使用は、適切であろうか。

さらに真宗学の基本用語を駆使して論述が進められる中に、これらの用語がしばしば用いられることは、論考の一貫性という点からも問題を残さないであろうか。方法論上の吟味が、あってよかったのではないか。

3. 論文の副題、「信仰主体性」ということばに、論者はどのような意味を託するのか。信仰が実現する主体という意味であるか。信仰の根源的主体を問おうとしたのであるか。その点の論述が、やや不分明ではなかったか。

その他、基本的用語のいくつかについて、その意味をめぐって質疑が交わされた。

親鸞が獲得し、主体的に生きた浄土真宗について、これを「往生浄土の仏道」と了解するのが一般である。その中で大谷大学の親鸞研究においては、浄土真宗を往生浄土の仏道と了解するにとどまらず、親鸞の著作を虚心に読解することをとおして、親鸞が情熱をこめて語り続けているものは、本願の名号に帰するところに実現する自覚道を、「大涅槃無上の大道」であるとする知見であると了解する見解が、次第に定着しつつある。

小野蓮明氏提出のこの学位請求論文は400字詰原稿用紙に換算して947枚に及ぶ大部の論文であるが、論者は上記の親鸞理解に連なる立場をとり、一貫して涅槃無上道として真宗を開顕した親鸞の知見を推求し、論考している。

この関心に立っての親鸞の思想研究にかかわる先行論文を十分に参考とし、「行信」という親鸞独自の信仰理解について、「行信道」という実践的関心に立って、厚みのある論考を展開している。それとともに親鸞が「行信」と表明した信仰的自覚を、それが独自の「信仰主体」乃至は「信仰の実存」を実現するものと捉え、その意味と根拠を、大切な意味をもち、かつこの主題を論考するについて不可欠であるいくつかの視点から推求していった点に、この論文の個性があると評価することができる。

論者は、その長年にわたる親鸞研究をいわば集大成しつつ、上記した関心に立って論題についての論考を果たしている。試問で提起された若干の問題点はあるけれども、審査委員一同は、小野蓮明氏提出にかかるこの学位請求論文を、十分にそれに値するものと判定した。

#### 〔最終試験及び語学試験の結果〕

審査に当たって必要とされる最終試験および語学試験については、論文の内容およびそれに関連する事項について、上記したように面接試験ならびに語学試験を行い、論者が学位規程の定めによって必要とされる学力を有することを、審査委員一同確認した。